実践記録・実践報告

鼓動
―「田中孝記念立教大学コミュニティ福祉学部和太鼓プロジェクト」陸前高田公演活動報告―

中山健二郎
（コミュニティ福祉学研究科・博士課程後期課程２年、
「田中孝記念立教大学コミュニティ福祉学部和太鼓プロジェクト」学生幹部）

Ⅰ．はじめに

2017年８月７日に、岩手県陸前高田市の気仙町で行われた「気仙町けんか七夕祭り」において、「田中孝記念立教大学コミュニティ福祉学部和太鼓プロジェクト」による公演が実施された。本プロジェクトは、トヨフレックス株式会社創業者、田中孝氏のご支援のもと、2016年11月に発足し、コミュニティ福祉学部の学生を中心として構成された和太鼓チームである。今回の公演へ向けて、陸前高田市出身、県立高田高校の卒業生である村上空さん（コミュニティ福祉学部２年）をプロジェクト代表として、「被災地の方々に楽しんでもらうため、まずは自分たちで楽しんで太鼓を叩こう」という思いをメンバーで共有し、練習に励んできた。

「気仙町けんか七夕まつり」公演の様子

2003年より林業体験プログラムなどで陸前高田市と交流を深め、震災後は同市を復興支援本部における重点支援地域と定めて今日まで支援を継続してきた立教大学にとって、陸前高田で生まれ育ち、立教大学に進学した学生が中心となって、地元を盛り立てる若い力として地域に戻り展開した本プロジェクトの活動は、大きな意味合いをもつものであったと言えよう。

本稿では、はじめに「田中孝記念立教大学コミュニティ福祉学部和太鼓プロジェクト」発足の経緯とこれまでの活動を紹介し、続いて今回行われた「気仙町けんか七夕祭り」における公演について、その活動内容を報告する。また、今回の活動を通じて感じた、現代社会における人と人との繋がりの在り方について、共同性という観点から考察を試みる。

Ⅱ.「田中孝記念立教大学コミュニティ福祉学部和太鼓プロジェクト」について

1.プロジェクト概要

「田中孝記念立教大学コミュニティ福祉学部和太鼓プロジェクト」は、田中孝氏のご支援を受け、松尾哲矢教授（コミュニティ福祉学部）の主導のもとに、「立教大学に和太鼓チームを創設し、その伝統を継承していく」という田中孝氏のビジョンに感銘を受けた立教大学教職員および学生13名を発足メンバーとして、2016年11月にスタートした。

プロジェクト集合写真
太鼓納品式「和太鼓祝福の祈り」にて

田中孝氏は、「立教大学コミュニティ福祉学部『田中孝奨学金（震災）および（児童養護）』」を創設されるなど、立教大学（立教学院）への多額のご寄付によって多大なご貢献をされ、2015年に立教学院功績賞を受賞されている。

「日本の伝統文化である和太鼓のもつ魅力と楽しさを存分に味わうとともに、和太鼓の演奏を通して、人を勇気づけること」を活動ミッションとした本プロジェクトは発足当初より、立教大学と繋がりの深い陸前高田において公演を行うことで、被災をされた方々に少しでも元気とエネルギーを与えることを初年度の第一目標に掲げて活動してきた。

本プロジェクトにおける和太鼓演奏は、太鼓の音色のみで音楽を構成し、複数の奏者が複数種類の太鼓を演奏することで集団として音色の変化を表現する演奏形式をメインとしている。

稽古にあたっては、埼玉県和光市を活動拠点とする「和太鼓会和光太鼓」の皆様にご指導を頂いている。「和太鼓会和光太鼓」は和太鼓会として40年以上の歴史を持ち、国内外で活発な演奏活動を展開している。2012年には外務省の要請を受け、フィリピン国セブ島で行われた『ジャパンフェスティバルin CEBU 2012』にスペシャルゲストとして参加するなど、日本を代表する和太鼓会として活躍されている。同会のセブ島での公演以来、同公演に大きな感銘を受けた田中孝氏と同会のご縁が続いていたこともあり、本プロジェクトにおける和太鼓演奏の技術的なご指導を担当して頂く形となった。

「和太鼓会和光太鼓」演奏風景

２．これまでの活動

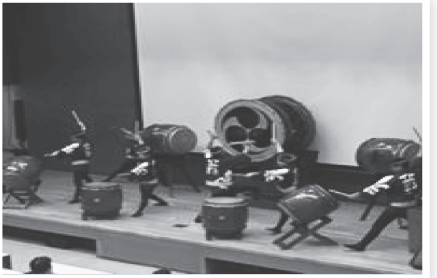
初練習の様子

2016年12月、会長の田中泰秀氏を始めとする「和太鼓会和光太鼓」の皆さんをお迎えして、本プロジェクトの練習が開始された。本プロジェクトメンバーは全員、本格的な和太鼓演奏の経験がないため、和太鼓とはなにか、バチはどう持つのか、どう叩くのかといった基礎を一からご指導頂いた。一言で「叩く」といっても、きちんと基礎を踏まえた動きができなければいい音がならず、経験のないメンバーにとっては、ちゃんと音を鳴らすことも難しい。また、太鼓の音だけで演奏を構成するため、リズムや強弱などを変えながら、色々な叩き方を一つ一つ練習して習得していく必要があった。初練習以降は、主に週に一回の全体練習、および土曜日に行われる「和太鼓会和光太鼓」の練習会への参加を通じて稽古を進めた。

2017年３月13日には、田中孝氏にご支援いただきコミュニティ福祉学部が購入した和太鼓の納品式「和太鼓祝福の祈り」が行われ、また、４月６日には、コミュニティ福祉学部の新入生を対象とした「学部ウエルカムアワー」にて、本プロジェクト初の公演として「はじめの一歩」という曲の演奏を行った。

「気仙町けんか七夕祭り」に向けての本格的な練習は2017年４月から開始された。「学部ウエルカムアワー」にて演奏した「はじめの一歩」、およびより複雑な曲構成となる「夜祭り太鼓」の２曲を演奏曲と定め、これまで行ってきた基礎的な稽古はもちろん、パートの割り振り、フォームの習得、強弱をつけることで曲としての完成度を高めるなど、より本格的な練習を行い、夏へ向けて稽古に励んだ。祭り直前となった７月の終わりには、毎日の全体練習に加えて、各々のスケジュールに合わせて自主練習を行い、技術を磨いてきた。

「和太鼓祝福の祈り」にて


「学部ウエルカムアワー」にて

Ⅲ.「気仙町けんか七夕祭り」における公演に関する活動報告

1.「気仙町けんか七夕祭り」について

「気仙町けんか七夕祭り」は、岩手県陸前高田市気仙町今泉地区において毎年８月７日に行われる、約900年の歴史を持つ伝統的な祭りである。可憐な装飾で彩られた複数の山車に、樹齢50年以上の杉の丸太をくくりつけ、お囃子の音と共に山車同士を激しくぶつけ合う勇壮な祭りである。

ぶつかり合う山車
2017年「気仙町けんか七夕祭り」にて

2011年の震災時には、それまで使用されていた山車が津波で消失してしまったが、高台で保管されていた昔の山車を修復し、同年の８月においても、２機の山車によって祭りが開催された。以来この祭りは、株式会社カスミの支援などを受け、今年までその伝統を絶やすことなく継続している。

2．活動報告

「気仙町けんか七夕祭り」における公演にあたり、本プロジェクトは2017年８月６日～８日の３日間、陸前高田を訪れ、活動を行った。本プロジェクトの活動内容として、祭りの前日である８月６日に行われたスタディーツアー、および８月７日、祭り当日の演奏について以下に報告する。

（1）スタディーツアー

2017年８月７日、「気仙町けんか七夕祭り」の前日、演奏の前に、東日本大震災による陸前高田の被災状況および現状を学ぶため、スタディーツアーを行った。

会場の下見、打ち合わせをする様子

一ノ関駅駅からバスに乗り換えた本プロジェクトメンバーは、まず祭りの会場の下見および関係者への挨拶のため、祭りの会場訪れ、演奏場所の確認や、当日の動き方などの打ち合わせを行った。メンバーにとって、野外で太鼓の演奏を行うのは今回が初めての経験であるため、準備の進む会場や装飾された山車を見て、本番に向けての緊張感が芽生えた。

復興まちづくり情報館前にて
10m以上の津波が襲った建物跡

会場の下見を終えると、次に「被災地復興スタディーツアー」として、復興まちづくり情報

箱根山展望台にて
阪神淡路大震災の復興で灯された種火を受け
継いだ「希望の灯り」の説明を受ける

陸前高田グローバルキャンパスにて
校庭で今も使用される仮設住宅を眺める

館、箱根山展望台、および陸前高田グローバルキャンパスの見学を行った。陸前高田出身の村上空さんを除く殆どのメンバーにとっては、被災地を訪れるのが初めての経験であり、「思っていた状態とは全然違った」「まだまだ復興は途上であることを知った」など、実際の現場を体感することで改めて震災とその後の復興についての実情を学び、考える機会となった。

また、移動中のバスにおいては、「気仙町けんか七夕祭り保存会」の中心メンバーであり、本プロジェクトの学生代表である村上空さんの父、村上徳彦氏に自身の震災体験についてお話を頂いた。「常にリスクへの意識を持っておくことが大事」「被災をしたら、どのような行動も全て正解」というメッセージがとても印象的で、実体験に基づいた説得力のあるお話によって、非常時に自分自身の行動をどう考えるのかを学ぶ貴重な機会となった。

村上氏によるお話

スタディーツアーをするまでは、震災による東北地方の被害状況についてのメンバーの認識は、テレビや新聞、人の語りによって作られたものであった。そんな中、今回のスタディーツアーによって自分の眼でその現場を見て、肌で感じる経験ができたことは、まだまだこれから進めなければならない復興に自分がどう関わることが出来るのか、また、自分が同じ状況に陥った時にどう行動すべきなのか、自分事化してより具体的に考える貴重なきっかけとなったように思う。

（2）「気仙町けんか祭り」

８月７日、「気仙町けんか祭り」本番を迎えた。祭りはお昼前に始まり、山車２機が会場周辺の地域を練り歩いたあと、互いにその車体をぶつけ合う「けんか」

を行う一連の流れを何度か繰り返し、夜まで続けられる。夜には山車をひっぱる人手も増加し、山車に電飾が施され、祭りの盛り上がりも最高潮に達する。

本プロジェクトの出番は、お昼の休憩時に設定された。当日は早朝より雨が降り続き、雨天下では使用の難しい和太鼓の性質上、一時は開催が危ぶまれたが、多くの方々にご協力を頂き、雨が弱まる合間を縫って、演奏をする準備が進められた。

演奏に先立ち、学生代表の村上空さんによる本プロジェクトの紹介が行われていた。司会の方によって、空さんが陸前高田出身であり、「気仙町けんか祭り保存会」の村上徳彦氏の娘であることが紹介されると、会場からは大きな歓声が巻き起こった。

「大学に進学してできた仲間と、子供の頃から参加していたけんか祭りで太鼓を叩けることはとても嬉しい。一生懸命演奏したい」という空さんのメッセージは、同じ被災を経験した若者が、それを乗り越えて成長した姿を地域にみせる決意表明として、多くの人の心を打つものであったと思う。

夜、電飾が施された山車

見に来てくださった祭り参加者の皆様

紹介されるプロジェクトメンバー

演奏では予定通り、「はじめの一歩」および「夜祭り太鼓」の2曲を披露した。初めての屋外演奏であり、メンバーには緊張や戸惑いも多くあったが、何よりも、「楽しく元気に」という面を大切に、今できることを精一杯つぎ込んだ。会場からは「立教！」「がんばれ！」といった掛け声も飛び、沢山の歓声を頂いた。演奏を見られた方からは、「一生懸命さに感動した」という感想も頂き、

演奏の様子①

演奏の様子②

技術は未熟な中でも楽しんで叩くというメンバーの気持を伝えることができたように思う。

また、本プロジェクトの演奏の後、続けて「和太鼓会和光太鼓」による演奏も行われた。長い伝統の中で蓄積された技術と太鼓打ちとしての誇りを存分に披露するその姿に、会場の目は釘付けとなり、本プロジェクトメンバーも、いつかこのような演奏ができればという憧れと、これからの稽古に向けてのエネルギーをもらっていた。

「和太鼓会和光太鼓」による演奏

祭りの後、山車の前にて

こうして無事、本プロジェクトは発足当初の第一目標であった陸前高田での公演を終えた。初めてバチを握ってから１年弱の出来事であり、まだまだ技術的に未熟な部分も多く、今回の公演を機にもっと上手く叩きたいという感想をもつメンバーも多かった。しかしながら、そうした中でも、一生懸命、元気に叩くという姿勢は貫くことができた。本プロジェクトにおける演奏は、今尚震災の爪痕が色濃く残り、復興という言葉が現実に生活課題である人々に対し、簡単に「元気を与える」といえるほどのものではなかったかもしれない。それでも、一生懸命何かに取り組む若者の姿、とりわけ陸前高田で生まれ育ち、震災を経験した若者が、仲間と元気に取り組む姿を披露できたことは、立教大学と陸前高田のこれまでの関わりと今後の未来を考える上で、一つ重要な足跡となったことであろう。

Ⅳ.活動を通じて

今日の日本は、かつて人と人との繋がりのベースであった、場所に根付いた共同体が徐々に弱体化する道を辿っている。地元の学校を出たら地元の消防団や青年会に入り、地元の企業に就職し、自治会に入り、地元の人間関係の中で生きていくというモデルは相対的に減少してきており、若者や労働力が大きな町に流出することで過疎化が進む地域が増え、経済的にも疲弊していくといった課題が表出している。一方で、場所から開放された人々は、これまで場所が固定的に保証していた人との繋がりが無くなることで、自己決定の自由が増えると同時に、自分自身の存在の不安定さに対する不安を抱えてしまう。高度経済成長期は会社による終身雇用が共同体の役割を果たし、地域の共同体の代わりとしてコミュニティの機能を果たしてきたと言われているが、成長社会から成熟社会への移行により、終身雇用と経済成長の自明性が疑われ始めた今日の日本においては、益々

人と人との繋がりがどうあるべきかの問いが空転している。そうした社会において発生した東日本大震災を受けて、「絆」という言葉が社会的な標語として立ち現れた。しかしながら、人と人との繋がりの基盤を見失った社会において、この「絆」という言葉がいったい何を意味しているのか、どうすれば絆が生まれるのかに答えを出すことは大変難しい作業である。今日、我々は社会構造が生み出した存在論的不安に抗しながら生きていく術を身につける必要に迫られている。

本プロジェクトの取り組みにおいて、学生代表の村上空さんは、陸前高田出身者であり、現在は立教大学で学ぶ大学生という立場で、地元のお祭に「戻って」きた。これは、必ずしも自分の生まれ育った土地の共同体に現在進行形で属していなくとも、同じ町の出身であるという共同性によって、地域の人々と繋がっているという姿であった。例えば、初対面の人であっても、同じ地域の出身ということがわかった瞬間に、心の距離が近づき、話が盛り上がるという経験をしたことがある人も多いであろう。生まれ育った土地が共同体として機能する時代が終わろうとしていたとしても、そこに生まれる共同性は個人の中に生き続けているのではないだろうか。また、村上空さんとその他のプロジェクトメンバーは、日本の伝統文化である和太鼓を通して繋がりを持った。和太鼓は古来より神事の際に神と意思疎通を図る道具とされており、その音色は人間の鼓動を表していると考えられているという。全くの初心者であったメンバーも、一度太鼓を叩けば、体の真に響き渡る「鼓動」に魅了され、また共に「鼓動」を生み出す仲間との距離が近づき、チームとして連携を深めていった。これは、和太鼓の音色という日本人の身体に刻み込まれた共同性によって繋がりが創出された瞬間に他ならない。そうして多くのメンバーは、太鼓が紡いだ共同性によって村上空さんと繋がり、陸前高田の人々と繋がった。もちろん、ただ公演をしたところで、直接的に復興を前に進められる訳ではない。しかしながら、２つの共同性が紡いだ人間の繋がりは、個々人の存在論的な安心を得る無意識の連帯として、意味をもつものであったといえるのではないだろうか。こうした、幾重にもなる共同性による人と人との繋がりこそ、「絆」と呼ばれるものの現代的な姿なのかも知れない。